

長尾雅人先生ご逝去



2005年3月13日、日本学士院会員・京都大学名誉教授 長尾雅人先生が97歳のご生涯を終えられ、「古木が倒れる如くに」お浄土へ往生されました。先生は、1968年から

1989年までの21年間の長きに亘って、日本西藏学会の会長として本学会の発展にご尽力くださいました。先生が学会長として存在しているだけで、学問の世界における本学会の存在が評価されてきました。それは、先生のチベット文献を駆使した大乘仏教の中観と唯識についての比較文献学による思想研究が、世界の研究者をリードし、国際的な評価を得ていたからに他なりません。私も先生と同じ学問分野に身を置く一人として、先生の学恩に甚深の謝意を表すると共に、先生の学恩を門弟として直に蒙られた早島理氏と武内紹人氏に、追悼文をお願い致し、ここに掲載させていただきます。

日本西藏学会会長 小川一乗

長尾雅人先生の思いで——長尾塾の35年——

早島 理

長尾雅人先生は昨2005年3月13日に往生の素懐を遂げられました。享年九十七。門下生が白寿のお祝いの会（同年5月に予定）の準備を進めている最中のことでした。一周忌にお参りさせていただいて、改めて様々なことが思い出されます。長尾塾を中心に、先生からいただいた学恩の一端に触れてみたいと思います。

三回生進学にあたり仏教学を専攻することに決めた1968（昭和43）年の春、京都大学文学部東館にあった先生の薄暗い研究室

を、一緒に仏教学を専攻することになったN君と、恐る恐る訪れた。先生から「初級サンスクリット語文法」修得の有無を問われ、また仏教学を卒業しても就職はない旨告げられた。退室まぎわにN君が「長尾先生は悟りを得られましたか」と突如質問した。暫く黙考のあと、先生は静かに「仏教を学んでいると、解ったと思う時がある、しかしそれはよく解っていないことの始まりにすぎない」旨のことを話されたように記憶している。

—長尾雅人先生ご逝去—

数多くの門下生のなかで京都大学での最後の学生に属する筆者は、いわゆる 69 年大学紛争の世代である。紛争の一番激しいとき、火中の栗を拾われるように先生は文学部長の職に就かれた。学問研究とは一番縁遠いところで先生がご苦労された時代である。学友会との徹夜団交、学部封鎖といった異常事態の中で、堅忍のまま先生はいつでも静かに「仏教では…」と切り出し始めて学生達と話され、危機の時代を乗り越えられたことが鮮明に思い起こされる。晩年、仏教の真髓を現す言葉として、先生は色紙に「ksānti 忍」の字を認められた。云うまでもなく「忍」の根本は諦察法忍で、その上に忍苦や忍耐がある。先生の仏教理解の何事かを暗示しているかのようで興味深い。

文学部が当時開講していた学部共通語学の一つに「初級チベット語」がある。長年、東洋史の佐藤長教授が担当されていた。ところが紛争後、そしてご退官直前の年、「初級チベット語、担当：仏教学教授長尾雅人」と掲示された。どのような経緯で先生がご担当になられたのかは不明である。また研究室の諸先輩に尋ねても、長尾先生の「初級チベット語」を受講したという話は聞かない。恐らく文学部で長年教鞭を執られたなかで、最初にして最後の「初級チベット語」担当ではなかったろうか。

初級文法は一通り学んだつもりではいたが、先生の「初級チベット語」に引かれ筆者も受講した。受講学生は一級下の T 君（現在は生駒市で社会福祉事業を通じて仏教の慈悲を實踐している）をいれて数名であった。

最初に教科書として明石恵達『西藏語文典綱要』、池田澄達『チベット文法入門』などの紹介があった。しかし文法の説明は最

初だけで、いきなりテキスト講読に入った。講読しながらチベット語文法と内容を理解する方法である。幾つかの短いテキストを読んだが、『阿弥陀経』は最後まで読み終えたように記憶している。最後まで受講したのは結局 T 君と二人だけ。単位取得を必要とした T 君が、長尾先生から「初級チベット語」の単位をいただいた唯一の学生である。

ご退官された 1971 年（昭和 46 年）、五月連休明けの某日、当時京大人文学部研究所におられた荒牧典俊先生から、東山泉涌寺の長尾先生のご自宅に参上するようにとの連絡があった。長尾塾研究会の開講、それも先生と塾頭荒牧、塾生早島の三名での開講である。テキストは『攝大乘論』であった。本論と諸注釈を、蔵訳、漢訳を参照し、サンスクリット原典を想定しながらの厳密な解説が始まった。

『攝大乘論』の解説を通じて、先生の原典解説の厳しさを肌で感じる事ができた。それは単に『攝大乘論』の厳密な解説というだけではなく、無著に伝えられた仏陀の直説をそのままに理解し、仏法を現代に正しく伝えようとする伝法者とでも云うべき厳しい姿勢が感じられた。そういえば、先生の一周忌には直筆の「dharmadīpa 法灯明」が掲げられていた。「法灯明」を灯し続けたご一生でもあったと云えよう。

研究会で『攝大乘論』第 3 章「入所知相分」の「無分別智」(III-12) 解説の折、無分別智の構造（加行道四善根位での加行無分別智、初地入見道における根本無分別智、第二地乃至第十地の後得無分別智）を説明する中で、向上と向下（菩薩の初地から十地へと向上しつつ、無分別智から後得清淨世間智へと向下する）、世俗と勝義、縁起即

—長尾雅人先生ご逝去—

空性、三性説の由来と意義、そして往相還相の二種廻向（『教行信証』）へと、先生のご理解が展開された。

梵蔵漢の諸テキストの精密な解説に基づく仏教思想の解明と、先生ご自身の哲学的あるいは宗教的思索が一つに解け合った講義である。後々まで先生が口になされていた、フィロロジカルな視点と同時にフィロソフィカルな見地を堅持した研究（あるいはフィロロジーに裏付けされたフィロソフィーの研究）を自ら実践されていることを実感した。

研究会終了後にビールをいただきながら、『攝大乘論』は東方文化研究所に勤めだした頃から読み続けているが何度読み直しても難解であること、和綴の大蔵経を古書店で求め、切り張りしながら諸訳対照本をご自身で作成されたことなどを拝聴し、またその諸訳対照本を実際に拝見することができた。

この長年にわたる『攝大乘論』研究の集大成が大著『攝大乘論 和訳と注解』（上1982、下1987、講談社）である。想定サンسكريット原典（還元梵文の一部が付記されている）を考慮しつつ蔵文からの注意深い和訳が、対比された漢訳の読み下しとともに提示されている。さらに、周到的な注解は長年の研究成果の結実したものといえよう。この『攝大乘論 和訳と注解』は瑜伽行唯識思想研究を飛躍的に発展させたのみならず、瑜伽行唯識学派の思想形成と大乘仏教の成立との関わりに新たな展望をもたらしたことに留意したい。この大著の校正や、後の索引作成（2巻本、1994）などに長尾塾の当時の塾生が協力したことは言うまでもない。

同じく研究会で、『大乘莊嚴經論』（以下

MSA）研究の経緯をお聞きすることができた。山口益先生を中心に野澤静證先生などと蔵訳安慧釈をガリ版で印刷しながら『大乘莊嚴經論』を読み続けたこと（例えば安慧釈第6章「真実品」ガリ版刷ノートの末には「昭和9年11月15日」の日付が記入されている。さらにその下に「June 1,62」と加筆されており、何度も読み返されたことが伺われる）、その時タイプライターを利用して語彙カードを作成し続け、それを元に後年同論書の梵蔵漢索引（2巻本、1958,61、日本学術振興会）が刊行されたことなどである。特に語彙採取の方法（思想語彙索引を意図して採取）に苦心されたとのことであつた。この索引の語彙採取方法は世界の研究者から高く評価されている。しかし先生ご自身はまだまだご不満だつたご様子で、訂正版を意図されていたのであろうか、再三の要請にも関わらずこの索引の再刊は最後まで承諾されなかつた。

長尾塾は『攝大乘論』解説が一段落した後、MSAの解説研究に移る。先生は梵蔵テキストや語彙カード作成に早くからタイプライターを利用されていた。テキスト解説にいち早くパソコンを導入したのも先生である。自ら Nagao-font を作成して研究作業の効率化を図られた。機種は途中から Mac を使用し、晩年もパソコンを利用して MSA を読み続けておられた。そのパソコンデータを何度か見せていただいたが、MSAの全章にわたって、偈頌と世親釈の梵文・蔵訳・漢訳の対照テキスト（偈頌の蔵訳が世親釈の偈頌蔵訳と異なる場合はそれを丁寧に注記してある）と和訳、それに注記が克明に記されている。注記には梵文の訂正とその根拠、蔵訳や漢訳の解釈が梵文と異なる場合はその説明、蔵訳に残存する無

—長尾雅人先生ご逝去—

性や安慧の復注釈の解説にもとづきその和訳を取り入れた詳細な解説などが丹念に記されている。和訳のみならず、多くの章では英訳が試みられている。さらにデータには読み終えた日付が記入されているが、古い日付のあとに何度も新たな日付が追記されていて、全章を長年にわたりくり返し解説されていたことが示されている。

筆者の知る限り、MSA に関する先生のノートに三種類ある。一つは世親釈を中心としたタイプ印刷版ノートである。次は上記の安慧釈ガリ版刷ノートで、この両者は章毎に製本され、幾重にも書き込みがなされまた日付が記入されている。最後が如上のパソコンデータ版である。前二者を統合しながら新たなノート作成を試みられたようである。いずれにせよこれらのノートは長尾先生が『攝大乘論』や『中辺分別論』とともに、MSA をいかに重視していたかを物語っている。

長尾塾で先生が最後まで読まれたのもMSA である。「『大乘莊嚴經論』の和訳と注解 - 第一章第一偈から第六偈まで -」が文字通り最後の論文である。先生の一周忌に合わせて公刊されたのは何よりでした（龍谷大学『仏教学研究』58・59 合併号）。

研究ノートではあるが、MSA 研究に関していえば、先生のご研究が宇井伯寿訳、S.Lévi 訳を遙かに凌駕していることは言を待たない。後進のために何らかのかたちで公にされることを望むものである。

先生が戦前に蒙古ラマ廟調査から帰られたら白髪になっていたこと、インド仏跡調査でご苦労されたこと、梵本『中辺分別論』の写本解読で目を悪くされたことなどなど、研究会で多くのことをお聞きしたがここでは省略する。

長尾塾は開講以来、漸次、瓜生津隆真先生・片野道雄先生、それに京都大学や龍谷大学の若手の研究者が参加し、時に海外からの留学生を交えながら、また会場も泉涌寺のご自宅から龍谷大学に移しながら継続して行われた。

時には泉涌寺を訪問された海外の研究者の多くの方がそのまま長尾塾に出席された。ゴメツツ博士、ルエッグ博士など枚挙に暇がない。先生が世界の仏教学の中核であったことを物語っている。先生が国際仏教学会 (IABS) の創立にご尽力され、初代の理事長 (1976-78) に就任された時のお話を伺ったのもこの研究会においてであったと思う。

長尾塾は現在も続き、荒牧・桂紹隆両先生を中心に、長尾先生のノートをもとに『大乘莊嚴經論』の解説研究が龍谷大学大宮校舎の一隅で行われている。ご退官の 1971 年から現在まで 35 年余、その間、多くの塾生が長尾先生から直接ご指導をいただき仏教学を学ぶことができた。

長尾塾研究会がかくも長きにわたって存続し続けることができたのは、ひとえに奥様やご家族の方々が支えて下さったからである。ご自宅で研究会が持たれていた時は毎週遅くまでお邪魔し、研究会の合間や終了後にお茶やビールをご馳走になりました。会場を龍谷大学に移してからは、奥様やご家族の方が付き添って下さいました。随分とご迷惑をおかけし、またお世話になりました。改めて感謝する次第です。

厳しかった先生と優しくった奥様を偲び、長尾塾研究会を続けながら先生の仏教研究を後に続く人たちに伝えたいと思います。

合掌

—長尾雅人先生ご逝去—

追記 先生の来歴や業績など多くのことを省略しました。先生ご還浄のあと、次の追悼文が出されています。参照していただければ幸いです。辻村公一「故長尾雅人会員追悼の辞」(日本学士院紀要 60-2)。Jonathan Silk, 'Eulogy: Ganjin M. Nagao' (MAHĀPĪṬAKA Newsletter New Series 11, 2006)。服部正明「長尾雅人先生

を偲ぶ」(東方学 110, 2005)。荒牧典俊「長尾雅人先生への弔辞」(同上)。桂紹隆「世界を駆けめぐった仏教学者、長尾雅人先生の思い出」(同上)。御牧克己「長尾雅人先生のご逝去を悼む」(以文 48, 2005)。長尾塾研究会編『長尾雅人師を囲むで』(故長尾雅人先生の追悼法要並びに偲ぶ会事務局、2005)。

長尾雅人先生を偲ぶ

武内 紹人

長尾先生は、父(紹晃)の事実上の師であり奥さまと母が血縁だったので、子供の頃からよくお会いしていたらしい。おぼろげに憶えている先生は、皆がすき焼きを食べ終わるのを待って鍋にご飯を入れおじやをつくって食べる白髪のおじさんだった。京大入学が決まった直後、久しぶりにお会いした先生は、「こわい!」と聞かされていたわりにやさしかった。「京大にはまともな思想家はいるのですか...」という生意気盛りの議論にも辛抱強くつきあって、「まだお前は学問を何も知らないんだから、まっこれからちよくちよく来なさい」と言われた。

それ以来、月に一度はお邪魔してご馳走になった。夕食の後、先生は音楽を聴き三千ピースのジグソーパズルをしながら議論の相手をしてくださる、もちろんウイスキーも飲みながら。で、私が酔っぱらって帰るか、そのまま寝てしまった後、先生はウイスキーをもって渡り廊下の向こうの書斎にこもって朝まで仕事をし、パンとウォッカの朝食をとっておやすみになる。

この生活パターンは京大退官後、80代後半になって初めて(!) 病気らしい病気を

するまで変わらなかったと思う。自分も少し年を喰って、酒と夜更かし好きだけが長尾先生との共通点だと覚った私にとって先生はこの上なく心強い存在で、いつしか学者の理想像と仰ぐようになっていた。ただそれは、先生が好きな学問に専念できるようにとの御家族の暖かい配慮の賜だったと思う。

ご自宅に招かれた方は誰も長尾家の開かれたホスピタリティを感じられたことだろう。正月やお茶会、研究会の後、外国の学者の訪問など折りにふれて開かれた長尾家のパーティでは、先生を中心にお酒と議論があふれ、サロンとはこんなものかなと思わせるのびやかで楽しい雰囲気だった。先生は、話がよく聞こえないんだと言いながら楽しそうに飲んでおられたが、ときに鋭い学問的疑問をぶつけて、荒牧先生やレスリー河村先生など居合わせたお弟子を議論に巻き込まれることもあった。門外漢の私にはよくわからないが、先生の質問は「なぜそうなんだ?おかしいじゃないか?」という既存概念に対するとても素直な疑問に感じられた。上山大俊先生の「長尾先生は